

## 歴史をつづる

関根 敬一郎

先日、目にとまった「千川上水展」の案内ポスターに惹かれて丁郷土資料館を訪れた。五十年余り前の幼時の生活の痕をなぞってみたいという気持からである。かつて子供の関心と時間の大きな部分を占めた郊外の田圃や水路の水生动植物などを包む地理的空間が実体ある密度で今も残っていることはまずありえない。しかし既往の証跡が何がしか得られるかも知れないという期待があった。——そして会場で視野を充たしたものは子供が住んだ小世界以上の、遺物・史料によって構成された歴史世界であった。それらの展示品はへかつての現在へからへ現在という最新の過去へまでを語り、失われた水流を甦らせる動きを伝えていた。

この訪問には予期せぬ驚きが伴った。同館の刊行物に『集団学童疎開資料集』があり、それに自分と同世代の児童の日記（昭和十九、二十年）が大量に収録されていたのである。「……空襲の後勉強に困るからと、算数や国語の教科書を持って待避することに決ったが、私は、出来るなら、教科書より一年からの日記を持って待避したいと思ふ。教科書は買へるが、日記は買へない。教科書は書き写せるが、日記はそんなことは出来ない。空襲の時は日記を持って行くことに決めた。」というくだりには、既に記録者としての尋常ではない自覚が息づいている。近ごろ新聞紙上で折々、大概は外国の例であるが、文書保管所に保存された記録によって歴史的事件が解明され、個人が判明したという類の記事を見受けることがある。いずれもわが国に反省を促す事例であることが多いが、記録の存在価値は歴史の証拠として普遍的な真実を告げることにあるであろう。こうした使命を担いうるのは児童の日記とでも同じである。

年度はじめの文書調査委員会議での席上、たまたま話題が私記録としての日記を集めてはどうかという点に及んだ。時代や世相を反映し天象地象などを観察した日記は、庶民の目の位置で歴史をつづった貴重な史料である。公文書の中に収録されることのない近現代の私記録には、歴史を知るための多くの材料が蔵されているということが出来る。文書館の原点は言うまでもなく史料の収集・整理・保存・利用に求められるが、歴史をつづる見えぬ手によってそれは支えられていることに想い至るのである。